

かぜが凧ぐ
においが凧ぐ
うみが凧いでた

世界がおくれて凧ぎはじめた
子供の哭く声とときだす
凧ぎの打ち水

あめが凧ぐ
みぞれが凧ぐ
ゆきが凧いでた

世界がおくれて凧ぎはじめた
永遠(とわ)の祈りがときだす
凧ぎの鐘の音(ね)

2024

飛鳥世一

作品集

だれもが凧ぐ
ひとが凧ぐ
無為にきづいて凧いでいた

世界がおくれて凧ぎはじめた
長じえの誓とときだす
凧ぎの祝祭

2024年 飛鳥世一 作品集

飛鳥世一 作

詩編 9作品
ショートショート 8作品(解説含む)

目次

はじめに	1
----------------	---

■令和六年 世一の詩匣よりの抜粋

世一、韻文詩する『詩編風ぎ』	7
世一、詩する 詩編『道 程』	9
世一、詩する『詩編雨に詩えば』	12
世一、韻文詩する『超改訂版 詩編百花繚乱』	13
世一、劇詩する『詩編竿屋のこえ』	15
世一、韻文詩する「また会いましょう 冬至に～」	17
世一、自由詩する『こよみ・来夜美って気分』	19
世一、詩する『食葬 (CANNIBALISM)』	21
世一、韻文詩と自由詩する『彼岸花・生きる』	25

■令和六年 世一のショートショート

一見独白型ショートショート『小説 貧 乏』2447字	29
絵画で綴るショートショート韻文劇『お為ごかし』6267字	34
付記に俺流解析綴じ込み・ショートショート『えん嗟』本文3399字	43
ショートショート「小説・尋常なる異常という日常」3340字	48
ショートショート「尋常なる異常という日常」俺流解説編	54
一服ショート「小説刹那にかわる愛を探して」1229字	58
俺流解説編 ショートショート『小説 Fae Trap』	62
ショートショート『小説 Fae Trap』3461字 “ポエベルという世界”	66

はじめに

さて、筆者にとってのこの一年を振り返ると……

若くして鬼籍入りを見た実弟の壮絶なる闘病死は筆頭となる。まだ五十九歳だった。人工透析にはじまり、足壊疽による左足の切除術、予後不良による壊疽は体中への広がりをみせた。闘病期間は1カ月半だった。幸いなことに死に水はとってやれた。父の他界、母の他界に際しては、死に水を取ってやることができなかった。独りで闘病していた実弟の淋しさを慮ると、せめて傍には居てやりたかった。

その後、なんとか三人の納骨をすませ、無事に送りだしてやることができたことが何よりではある。つぎは、わたしの番である。

他方、我がことに目を向けると～ 膵臓だろう。直径10mmをこえる石が膵臓膵管部に3個見つかり、去年からの痛みとして続いていた。正直なことを書くと、痛み止めのロキソニンを彼此一年近く服用し続けている。日によっては4錠。少なくとも3錠だ。

なんとか手術の日程も決まり、外科の開腹手術によって石を取り出すことが決まっている。

年初、1月末も間近からの入院だ。

ただ、わたしの場合はまだ緊急性は高くはないらしい。

慢性膵炎が進行すると、急性増悪化はなかなか取れず、医療用モルヒネを常用するようになるそうである。相応しくないことを書くようだが、そうは為りたくは無いものだ。

創作に関して云えば、大したものを書いていない。

夢殿「秋涙」にしたところで、増稿、リライトしたとは云っても焼き直し程度のこと。新作と云ったところでショートショートが目一杯。中編長編などは書くまでもない。

そんな中、詩編だけは勉強もでき、なんとか恰好だけはつけられるようになってきたのか。

同時に今年最後に書き上げた「詩小説」。私がいう処の「ポエベル」の出来は良かった。

今回のこの飛鳥世一《ぐだぐだのすすめ》では、グダグダだった一年を通じ、なんとか皆様に読んで頂くに耐え得る作品を抜粋して遺してゆきたいと思う。
どうか「云い得ての妙よ。グダグダだったわなあ」と嗤う種にして頂ければ有難い次第。

言うではないか

嗤うかどには福来ると。

駄目だ。グダグダだわ (笑)

お楽しみください。

令和六年十二月三十一日

筆名 飛鳥世一



スクリーンショット 2024-12-15 13 15 05.png

■令和六年 世一の詩匠よりの抜粋

世一、韻文詩する『詩編風ぎ』

かぜが風ぐ
においが風ぐ
うみが風いでた

世界がおくれて風ぎはじめた
子供の哭く声とときだす
風ぎの打ち水

あめが風ぐ
みぞれが風ぐ
ゆきが風いでた

世界がおくれて風ぎはじめた
永遠(とわ)の祈りがとときだす
風ぎの鐘の音(ね)

だれもが風ぐ
ひとが風ぐ
無為にきづいて風いでいた

世界がおくれて風ぎはじめた
長(とこ)しえの誓(ちかい)とときだす
風ぎの祝祭

母音律 あいうえお、あ …… 風ぎ

世一、詩する 詩編『道程』

詩編『道程』

背負子をしょって歩いてる
石がたくさんはいつた
躰傾け道を往く
俺は重いでしょうと声かけた
男いふ
なあと、しよえる石を集めたたけさ
躰が前えとのめつてますよ
転ばないでと声かけた
男いふ
踏ん張るためにのめるさ
私は声かけ、それでは周りの景色も見えませんが
野ユリが道端こうべをさざみます
男いふ
なあと、拾った石が教えてくれる
山で拾った石は焼けたにほい
川で拾った石は水のにほい
草原の石は草露のにほい
男、やにわに立ち止り
後ろ振り向き汗拭う
ウチは訊ねる、何見ていると
後ろの景色と足跡さ
野ユリの橙あお空染めてた
山あり川あり草原あり
爪先だけが扶れた足跡あり
僕が探した自分の足跡
きつと並んでついているはずさ



アグリ.jpg

背負子をしょって歩いてる
石がたくさんはいつた
躰傾け道を往く
俺は重いでしょうと声かけた

男いふ

なゝに、しょえる石を集めただけさ

躰が前えとのめってますよ

転ばないと声かけた

男いふ

踏ん張るためにのめるさ

私は声かけた、それでは周りの景色も見えません

野ユリが道端こうべをきざみます

男いふ

なゝに、拾った石が教えてくれる

山で拾った石は焼けたにほい

川で拾った石は水のにほい

草原の石は草露のにほい

男、やにわに立ち止り

後ろ振り向き汗拭う

ウチは訊ねる、何見ていると

後ろの景色と足跡さ

野ユリの橙あお空染めてる

山あり川あり草原あり

爪先だけが抉れた足跡あり

僕が探した自分の足跡

きっと並んでついてるはずさ

世一

世一、詩する『詩編雨に詩えば』

雨つづき じゃぶじゃぶに なった道 だって長ぐつ の友達だよ
ジャバンと 飛び込む音も カッコいい だって長ぐつ 百人力
グズグズに なった短靴 はけなくた ってかまわない 長ぐつあるよ
ずっと降れ 長ぐつ買った ずっと降れ 短靴はけない 臭くてはけない
神様さ おてんとうさま いないよ だって長ぐつ には似合わない

阪大病院のベッドサイドのテーブルから
世一

世一、韻文詩する『超改訂版 詩編百花繚乱』

『超改訂版 詩編 百花繚乱』

山のぼり 巔みれば 九十九峰※ 目を細めつつ 百とせ※あゆむ
咲き姿 持戒ただよふ 郁子の花 険しき道も 心和らぎ
風繚り※ 身を屈めけり 九十九折り※ 背中※を前むけ 曾呂利曾呂利と
肚すえて 乱るる髪を くくりみて 泥梨※手まねく 極楽の門

■母音律 あいうえお順, 一句一字 百花繚乱

九十九峰……つくもみね (多くの峰々が山肌をこすり合わせ重なった様子)
百とせ……ももとせ (百年、長い年月)
風繚り……かぜめぐ-り
九十九折り……つづらお-り
背中……せな
泥梨……でいり (地獄)

尚、作中、九十九という言葉が二度使われているが、これは意図的なものであり、間違えではない。



苦しんだ。最初の『詩編百花繚乱』を捻り出す苦勞を感じることはなかった。ルールは簡単。百花繚乱を一句に一字入れるだけ。繚乱の繚の字も意味さえ分かれば嵌り易いものだった。あとは五七五七七という韻律だけだ。
一時間もかからず仕上がった。

ところがだ。韻文というルール、韻文詩という制限が掛かっただけでハードルは上がった。『詩編百花繚乱』をベースに詩作してみたが、とんでもなく難度が高い。これを昔の歌人はその場で闘歌したというから恐れ入る。結局私は延べで4時間を要した。ただ小説の地文や会話文にこのエッセンスを入れられたら～重層感であり美しさは段違いに高めることが出来るだろう。少しずつ条件を変え乍ら取り組んでみたい。韻をふむ遊びはやったことがあるが、条件、制限、ルールとして詩をするとなると話は別だ。久しぶりに脳が汗を流した。

世一、劇詩する『詩編竿屋のこえ』

"奏でてよ

鈴々(りんりん) チリリン

風鈴さん

メダカときんぎょも聞いているワ"

顔よせて

息を吹きかけ

ふうふうと

手を後ろくみ 頬(ほほ) 朱(あか) く染め

竿やこえ

道の向こうの

裏通り

背中きえいる 偲(おも) い出の夏

母音律 あいうえお順

劇詩（げきし、英語: dramatic poetry）とは、劇形式の詩のことであり、叙事詩・抒情詩と並ぶ詩の三大部門の一つ [1][2]。「韻文によって書かれた劇」という意味で、劇に重きを置く場合は、詩劇（しげき、英語: poetic drama, verse drama）と表現する [3]。

その昔は竿屋さんも「風鈴」を売ってあるいていた。

最初の一節だけ読めば、“竿屋のこえ”というタイトルに違和感が滲んでも不思議はない。

ただこの詩の場合は、風鈴が主役ではない。

読者の予想を裏切るのが一流の“いかさま師 (芸術家)”の手業、手練手管。

懐古主義的……ノスタルジーを触媒に少しのショッパサが感じられれば頂きますのだ。……二度ほど、大きくグラッとすることは表現できたと感じている。

この世界、一流しか登りつめられないし残れないからね。甘くない。

世一、韻文詩する「また会いましょう 冬至に～」

鉞を 凍てつくなかで 振り下ろし
せめて子らには お善哉をと

南京を 切り分けしつつ 蒸す支度
蒸籠せいろめぐりて 子の手をかりる

屋根氷 いつのまにまに 氷柱つららとし
背伸びせずとも 墮とす子の丈

了

短歌 韻文詩 母音律 あいうえお順

※付録 北海道でその昔よく食べられたカボチャに「まさかりかぼちゃ」と呼ばれる種類があった。今もあるかどうかは分らぬが、皮が固く厚ぼったく包丁では太刀打ちできぬことからその名がついた。身は甘くホックリしているのが特徴だ。子供の頃にコメの代用食としてよく食べさせられたものだ。

皆様も、冬至には親の思い出が被ることでしょう。
柚子をひとかけら浮かべると、サッパリと思い出せるかもしれませんね。

親というものは、なにはさておき子供なのだろう。

おふくろのことを思い出してみると、凡てが子供を中心に置いたものであったことがこの歳になりヒシヒシと感じられる。朝4時に起き、建設現場の飯炊きに赴き、9時に帰って来ては化粧品と保険の外交に出る。17時前に戻ると、18時にはスナックに出勤だ。

睡眠時間4時間以下。そんな暮らしが10年続いた。

尊敬と云う言葉が相応しいのか、他人事のように聞こえるのかはわからぬ。今の時代であるなら、そこまでせねばならぬ暮しぶりを強いた親に向けた言葉があるようだが、わたしには書けない。そして親には向けられない言葉だ。有り難いことだ。

何も考えず、子供の頃を思い出しながら仕上げた詩だが ** ____ ** **。

仕上がってみると、凡ての詩に「子」が入っていたことに、書き手自ら驚く始末。

少しだけ、ほんの少しだけ“あなた”の気持ちに近寄れたのかもしれぬ。

また会いましょう 冬至に～

合掌。

世一、自由詩する『こよみ・来夜美って気分♪』

『こよみ・来夜美って気分♪』

薄くなった日めくり横に
大きな一枚物のカレンダー
そこは2カ月前
それは半年前
出逢った日
死んだ日
ゆうゆう揺れた日
生まれた日
あの日はなんだっけ
わたしの知らない日
 あなたの心だけが知ってる日
僕の知らない日
 君の心だけが知ってる日

その日は…… 明日
なにも…… 決まっていない日
なにも…… なにもきまっていない …… 日
どうして不安がよぎるのだろう
 なにかがスッポリ抜け落ちてる

了

さて、今年もあと5日大切に大切に今日を作りましょう🎵

世一、詩する『食葬 (CANNIBALISM)』

詩編『食葬 (CANNIBALISM)』

我が身葬ふれよ
いまこそ時合い
どうせ喰わなきゃ書けねえんだ
内観内省
おもて看板似非 (エセ) 物語り
喰わにゃ書けない真がある
葬ふらにゃ書けない砦がある

喰ったところに蛆がわく
もっとおくれと蛆がわく
おいしいよ
おいしいよ
甘くて辛 (から) くておいしいよ
苦くて辛 (つら) くておいしいよ
喰えよ葬ふれよそして書け

両手両足残ってる
さてさて次はどこ喰うよ
雨戸もめて
カーテンもめて
灯りも墮としてどこ喰うよ
闇の中の祝祭 (Carnival)
Cannibalism Carnival
喰えや書けや食葬しろや
どうせ書かなきゃ逝けねえだろう

喰って恍惚

書いて自慰

葬ふれりゃ蛆は甘露に咽ぶ



速水御舟 炎舞.png

世一、韻文詩と自由詩する『彼岸花・生きる』

韻文詩『彼岸花・生きる』

奠しり 凜と背伸ばす 憂き世花 禪定立志 卒塔婆ヲふ道

さだめしり りんとせのばす うきよばな
ぜんじょうりっし そとば負うみち

母音律 あいうえお順

※

自由詩『彼岸花・生きる』

きみい〜きみは何故一人でここに居るんだい？

【チョットお お嬢が汚れちゃう】

え〜 赤いんですけどお〜

まさか病気？ 伝染病？

どうして？ どうして赫いの？

お前、赤の分際でここにいるなよ

なんか目障りじゃね？

誰だよおまえ

駄目だよみんなダイバーシティーだよ！

きっとアカなんだぜ
“垢” ってなんか笑えるんですけどお
垢バンしろ垢バン
どうせすぐに枯れるだろ
【…… …… ……赤も……いいなあ】
社会不適合華だろう？
マイノリティーか
反社じゃねえのか？
イヤだ、わたしも赤くなる？
おい…… どうだ何とか言ってみろ

__お前たちはなんでみんなで黄色いんだい？
そろいもそろってサ** __
アホっばいぞ w
まあ俺が赫い理由はな……
「あかいりゆうは？」

** * 神様に聞いてくれ。俺は今から昼飯だ。

了

飛鳥世一 筆

■令和六年 世一のショートショート

一見独白型ショートショート『小説 貧乏』2447字

一見独白型ショートショート『小説 貧乏』

吾輩は貧乏である。而してひと口に貧乏と云ってみたところでどの程度の貧乏であるかは伝わるものではない。雨露を凌ぐことすら事欠く有りさまであるのか、糊口を潤すことすら叶わぬほどの貧困をまとい、行政をはじめ支援者たちの温かな炊き出しにその日の糧を頼る。朝から晩まで足を棒にしてシェルターを廻り、有志から寄せられた浄財寄付物品に暮らしを拠るほどであるのか。こうして眺め見ると貧乏にも様々な状況というものがあることがわかる。

なるほど。清貧というものもあるか。これなどは信仰を拠りどころとし、寧ろ自らの選択を機能させた能動的享受姿勢による貧乏といえそう。おおむね雨風はやり過ごすことができ、日に一度とはいえ空腹も腹八分程度におさめ、腹が減れば空腹をしのぐために温めた石を懷に抱え横になる。なんとも詫び寂が効いたこの姿などは日本の懷石料理に通じてくる逸話の一つとしても知られるが、今世にあっては貧乏とは縁もゆかりもないところにあるのが懷石料理なのではないかと巡らせると、なにやら遜るのも大概にしなはれや〜と思えてくるのである。

吾輩が小学校の4…5年生の頃からだったろうか。成人するころまで吾輩の家は極貧であった。貧乏にランク付けがあるとするなら、「極貧」は最上級にランクインするだろう。そう。吾輩の家は最上級クラスの貧乏だったのである。

小学校の四年生。学校にゆけば町の顔役の息子から自治体窓口の借家家賃を払っていない窮状をクラスのなか詳らかにされ、その夜、それを父親に告げると顔を真っ赤にした父親はその顔役宅に怒鳴り込んだものか“誓願”しに行ったものか夜半に家を出たきりその夜に戻ることはなかった。今の時代であれば、改正個人情報保護法の機能により、公務員法違反であり、家主による個人情報保護法違反、プライバシーの侵害、名誉棄損、その他モロモロいかにしても法的拘束も可能な事案であるのだが貧乏ネタを飾るに相応しい思い出だ。

一週間のうち米の飯が食えたのは、三日程度だったろう。月になおすと半月以上は米の飯が喉を通ることはなかった。米を炊けば毎度毎度6合～8合だ。育ち盛りの男の子

二人。次に米が食えるのはいつになるかわかったものではなかった。餓鬼差乍らの喰いっぷり。母親がオコゲをへらでこそいでも取れるものではない。お湯を鍋底に流し込み、ふやけるのを待つとお袋は手に塩ぬっておにぎりを握る。吾輩や弟はそれを喜んで食べていた。月に数日は電気も止まった。プロパンガスも替えることができない日なども当たり前のこと。灯油も買えずルンペンストーブに薪をくべ暖をとる。

ストーブの上で湯を沸かし、味噌や醤油で味付けをした汁の中に小麦粉を練り上げた団子をおとす。米のない日の夕飯は団子汁だ。昨今では観光などで地方都市を巡ると団子汁を喰わせる食堂などをみかけることもあり、観光客が美味そうな顔をみせながらそれを流し込む姿などもみられるのだが、はて、それは美味しいのであるか?と訊ねてみたくなるのである。

「兄ちゃん、今日は米あるんだべか」

「なんもよ、コメが無ければジャガイモ蒸かしてでてくるべや」

「昨日も芋だったっけさ。イモ団子とポテトサラダ」

「せば今日は団子汁かもしれねえなあ。帰ってきてなんか食ったのか?」

「トウキビとプリンスメロンしか食ってねえ」

「さすがに飽きたべよ」

貧乏な家の兄弟の会話である。住む環境によっては貧乏な家の子供たちとはいえ、トウキビ、ジャガイモ、カボチャ、玉ねぎ、アスパラ、大根、メロンにスイカは季節ごとに食べ放題となる特権を有していた。住まいは概ね一軒家。他人の目や軒や屁の音に悩まされることはない。壁が薄といったところで隣の家まで200メートル離れていた。

米が食えないこととライフラインが時おりサバゲーよろしくサバイバルラインに変わるもののほかに不満はなかった。いや不満はなかったという表現は正しくないだろう。不満すら持っていなかった。寧ろ楽しんでいたといっても言い過ぎではない。

起きていると凍えるような寒さである。それは“刺さるように”という形容が相応しい北国の真冬。吐く息の湿度が掛け布団の首元に付着しそれが凍りはじめる。キャンプではない。家の中の話しである。

遮るもののない平原の中に建つおんぼろな家の内窓。月明かりが雪を照らし出すさまは色とりどりのシルクの糸を紡ぎあげた如くに艶めく。差し込む月明かりが布団の首元を闇夜に浮かび上がらせ凍りはじめた布団をキラキラと輝かせる。

「にいちゃん、なまら凍(しば)れるね。布団のえりのところシバレテきたっきゃ。ピカピカしてるさ」

「おまえ、アノラックでも着て寝とけよ。靴下履いてるか。ぼっこ手袋もはめとけよ」

「うん。おやすみ」

「……おやすみ」

思い返すと良い時代である。有難いことに吾輩たち兄弟はそんな暮らしをさせてくれた親を「毒おや」と思ったことはない。今世にあっては自慢といえるのだろう。毒おやという言葉を使ってきた人々の子供たちは、毒おやという言葉をもた受け継ぐのだろう。連綿と永遠に毒に毒された言葉が受け継がれてゆくのである。

実弟や吾輩が数年ほど行ってきた児童養護施設での食事の提供にしたところで、子供の頃のそんな経験が大きい。

「かあちゃん、おかえりー。今日ね、お米があったからご飯炊いておいたよ。カボチャも蒸かしておいた」

「そうかい、ありがとねえ。チャンと炊けたかいご飯、何合炊いたの」

「六合炊いたよ」

吾輩がはじめてガスで炊いた六合飯。流し台にはその格闘の跡。米を研ぎ、すすぎ流し、こぼれ出した米が水にふやけて山となっていた。炊きあがった米は芯の残ったメッコ飯。それでもお袋は何も言わず夕飯の準備をしていた。

「今日の晩ごはん何い？」

「今日はカボチャのカレーライスだよ」

「カボチャのカレー？」

色見だけがカレーであったことはいうまでもない。

了

泉下の人* ** 実弟と両親に捧ぐ

※リハビリである。書くためのリハビリである。

なお、一部の行において誤解を生んでもつまらぬので書き加えておくが

卑下批難したものではなく、中傷を目的としたものでもないことは付け加えておく。全方向的に説教じみたことを書くつもりは無いが、言葉一つで感じられる豊かさもあるでしょう。どれほど貧乏であろうと、心だけでも豊かでありたいと願いませんか。まずは手始めに。



絵手紙.jpg

絵画で綴るショートショート韻文劇『お為ごかし』6267字

絵画で綴るショートショート韻文劇『お為ごかし』

作 飛鳥世一

収録絵画

作 Louis LE NAIN ルイ・ル・ナン

タイトル La Charrette 1641 荷車 1641

作 Georges de La Tour ジョルジュ・ド・ラ・トゥール

タイトル いかさま師



影すら重なることもなく

近づきすぎることを避けるように～

二人で歩いているとは云えない距離を保つ

別に喧嘩をしているわけではない

寄せ付けぬのである

あからさまな

白々しさとでも云えばよいだろうか

“都合”の良い距離を保つことに意識は向かう

喧騒が心地よかった

交差点で立ち止まることに躊躇う

ワザとに

道を大きく

迂回し

狭い路地を

好んで歩いた

「玲子を誘って訪れてはみたものの、やはり失敗だったか……」

画壇界限でも人嫌いで知られ
自ら出不精であると任ずることを憚らない画家 益子達也は
苦し紛れの関係修復に
画を鑑ることを宗川玲子に提案した
そろそろ頃合いかと誘いだし街へと繰り出してみたものの……

「やっぱり失敗だったか……ヴィエナ以来……。2年だもんな **__**」

経ちどころなのか……
気まぐれ極まりなく
失せてゆく時間に
遠慮は微塵も感じられない
女四十前ならなおさらか

あれは
今から2年前
ヴィエナのレオポルド美術館を訪れ
エゴンシーレ作
「鬼灯のある自画像」にむきあったのが最後だった。

【たっちゃん、鬼灯の実って食べたことある？ そう **__** わたしも子供の頃に食べた
ことあるけど、妊娠したら食べさせちゃ駄目よ……流産しちゃうから】

達也は玲子の口がヴィエナでこの言葉を吐き出して以降
帰国ののち自ら進んで玲子に連絡を取ることはなかった
月を追うごとに玲子からの連絡は
手練手管を駆使したものとなっていた
それでも達也は自ら積極的に連絡を取る気にはなれないまま2年の歳月が流れていた。

逢いたかったと云って
君は信じられるかい

ウソよと君は云うだろ
寝たいだけじゃない
おまえはきっとそう吐き捨てる

地文凡て韻文 「あいうえお」順

■

「…… 益子先生は本当に勝手な人よね……自分の都合の良い時だけ呼び出して。どれだけ振りかわかってて？」

玲子は達也を益子先生と呼び、些か情を交わしたものの同士とは思えぬ口ぶり、口角に冷笑を滲ませた口ぶりで憎まれ口を紡ぎあげる。達也はそれには直ぐに応じるようなことはせず、歩く速度を玲子にあわせるように歩幅を狭める。怜子と自分の躰が重なる距離になるのを待った。が、怜子の脚は達也と並ぶことを拒否するようにその歩みを止めた。達也は玲子に向き直り「悪かったよ」サラリと云ってのけた。

達也は別に悪いとは思っていなかった。

マンションのゴミ出し。時折顔を合わせる同じフロアーの妙齢のご婦人に掛けられる「おはようございます」に返す「ごきげんよう」と同じ性質のものであった。そう。画家、益子達也は時と場合により「ごきげんよう」という言葉を好んで使う人種でもあった。

【近づきにくかろう。ごきげんようと返されれば】

そう。確かに“ごきげんよう”と宣(のたま)う人種においては、ごきげんようと返す人種しか傍には寄せぬものである。従って、日常生活で袖すり合う流れの中、めったにお目にかかることが出来ぬのが“ごきげんよう人種”であると思い込んでいた。

「悪かったよ……ヴィエナから戻って、立て込んでいた注文の画を仕上げていたら、いつの間にか……メールも電話も返信してたし……」

達也は、この2年間の忙しさを、余計な刺激をせぬよう言葉を選びながら玲子に告げた。達也の人嫌いにも通じてくるところだが、自由人でいたいのである。自分の行動が第三者の介入によって左右されることに不条理感を抱くことに我慢がならないのである。

達也の言葉を聞いていた玲子にしても腹の虫がおさまらない。言い分を聞いてやるという寛容さよりも、二の句の準備に余念なしを漂わせ、相手の出方を覗う雰囲気を湛えていた。

「そりゃあ分かるわよ。素人じゃないんだから、忙しいのだろうなあぐらいは想像もつくわ。でも……」 玲子の責め句は途切れることが無かった。

達也の折り返しの電話姿勢、使う言葉、思いやり、愛情表現と人格にまで及んだ。

こういう言い分を聞くと云うと達也の場合は具合が悪くなるタイプに分類される。我慢することに不条理感を感じることが抑えられないのである。

【溜まってるな ** __ ** **。だいぶ。そうだ思い出したぞ。ヴィエナから戻って半年少し過ぎた頃だったか…… 玲子からのメールでビックリさせたいことがあるから近いうちに会えないかしらってメールが来ていたっけ……】

「玲子ちゃん、そのビックリさせたいことっていったい何だったの？ 前にほらメールで書いて送って来てたじゃない」

玲子の顔に血の気が戻り、瞬時に秋薔薇の三番花を想わせる柔らかな赫みが射した。

【射し彩だ。この赫は玲子の射し彩だな……】

「ないしょ！！ 今迄放っておいた罰ヨ。少しぐらい“なんだろう”って悩んでみてちょうだい。2年ヨ。2年。2年も放っておいて……二年ありゃ、大抵のこと…… 何だって出来るのよ！」

「なんだか怖いねえ～ 穏やかじゃない(笑)」

玲子は達也の言葉には応えなかった。

「ほら、着いたわよ」目的地である東京国立ミュージアムへの到着を促した。

正面には「ルーブル美術館・フランスの最も暗い夜明け前・希望を射した絢爛のシュリー翼展バロック・ロココ・ネオクラシックへの誘い」という大きな看板が掛けられていた。

広大な展示面積を誇るルーブル美術館は、RICHELIEU 翼、DENON 翼、SULLY 翼と三つの展示ゾーンに分かれており、地下2階から地上3階まで時代ごと美術史の変遷ごとに分かれている。中でも「SULLY 翼シュリー翼」はフランス美術芸術と縁浅からぬ芸術家の作品の集積場として知られていたが、展示場としては奥の奥に在しており、RICHELIEU 翼の下層から SULLY 翼のバロック・ロココ・ネオクラシックゾーンまで行こうとすると1日で辿り着くことは至難の技としてルーブルファンには知られていた。

東京国立ミュージアム「ルーブル美術館・フランスの最も暗い夜明け前・希望を射し

た絢爛のシュリー翼展バロック・ロココ・ネオクラシックへの誘い」展は、そのシュリー翼に掛けられた作品を一堂に眺めることが出来る機会となった。

感染症対策下、入場は完全予約制だったものも、今ではすっかり自由入場へと切り替わっていたが、発券ブース前にはマスクをすることへの推奨が掲示され、自動で発熱を検知するモニターカメラが据え付けられ、「正常です」という自動音声聞いてから発券ブース前に移動することが義務付けられていた。

「で、ここに来ることは聞いていたけれど、何が鑑たかったの？ どうせ、なにか鑑たい画があったのでしょうか？」

「うん。ル・ナン兄弟って玲子ちゃんも知ってるだろ？」

「チョット暗めの画を描く……珍しく裕福な家柄の兄弟画家よね」

「そうそう。その画とさ、ラ・トゥールも来てるからね鑑ておきたいじゃない」

「でも、たっちゃん、ルーブルは何度も行ってるじゃない？」

「行ってるけどさ、知っての通り、へとへとになるじゃん。あそこ。目的をもって一つ一つの作品に向き合おうと思ったら、パリに棲まなきゃ無理だって。」

「そうよねえ** __ 判るわあ〜 わたしもパリに行くたびにルーブルは立ち寄るけど、いつも何処かしら工事してるし。結局はサントノーレやヴァンドームをうろつく時間の方が長くなっちゃうもの。館内にテントでも張れたらいいのに。そしたら時間を気にせず見られるじゃない」

「そうかなあ……玲子ちゃん、本当はヴァンドーム広場にテント張りたいんじゃないのカカカカカ」達也は云って大笑いを玲子に向けた。

「相変わらず嫌味な男ねえ…… ル・ナン兄弟の画は何が来てるの？」

「荷車っていう作品とトリック・トラックと、農民の一家なんだけどさ」

「荷車と農民の一家はなんとなく思い出せる気がするんだけど、トリック・トラックっていう作品は分らないわ……多分鑑たこと無いんだろうなあ」

「まあ、トリック・トラックはラ・トゥールと鑑比べると意味がありそうだからね。これは僕もはじめて鑑るから楽しみなんだよ」

「どうせ、自分の目的の画まで直行したいのでしょうけど、たまにはわたしの鑑賞スタイルに付き合ってくれても良いんじゃないくて？ 都合よく呼びだされたのだから。2年も放っておかれてさ」

「判った判った。仰せのままに」

達也は逆らいませんというように、玲子に道を譲ると後ろから玲子の背中に手を当てがった。

「たっちゃん、押さないでよ。混んでいるのだから」玲子の口から出る言葉に柔らかさが戻っていた。いつの間にかたっちゃんと呼び始めていた。

「これ？」

「そう。この作品だ** **。」

二人の脚は、Louis LE NAIN ルイ・ル・ナン作 La Charrette 1 6 4 1 荷車 1 6 4 1 の前で停まった。

「こういう色は僕には使えないなあ」

「今の時代じゃ売りにくいわねえ……こういう色彩で描かれた画を飾るに相応しい家が建たないもの。モチーフも厳しいわよね。美術館に掛けられて存在感を高める作品だわ」

「商売人だねえ～玲子ちゃんは。」

怜子は建築会社とのタイアップを通じ、新築の邸宅に飾る画をプロデュースしたり、先に飾る画を決め、飾る部屋をプロデュースしたりする仕事にまで手を広げていた。さらに部屋をプロデュースした後は、その部屋に飾る画を自分の画廊からレンタルするなど上手の手から水がこぼれ落ちぬよう工夫をし、クライアントからの好評を得ていた。

「どう怜子ちゃん、この画は。何か感じる？」

「子供が多いでしょ。大人っぽいのは2人かな** **子供達の顔がなんとも云えないわよね。」

「なんかこう……屈託のなさみたいなものが感じられなくて。あの位の年齢の子供でさ、なにかこう世の中を儚んでいると云うか、悟り切っていると云うか……そう… 妬み？ 嫉み？ 僻み…… そう** ** “どうせ” よ “どうせ”。まるで画を描いている画家の大人を見る目が “いかさま師” でも見ているように感じられるのよ」

「それとは対照的にこの大人の女性の顔みてよ。多分、画家のル・ナンからモデル代の謝金でも受け取ったのよこの女性。なんかサービス満点なモデルだと思わない？ そういう大人の場面を見ている子供たちの目が、まるでいかさま師を覗いているように感じられるのね。画から感じられる雰囲気は北方系の薫りがするのだけど。風俗画としては寧ろ農村部の現実と疲弊を炙り出そうとしているように感じるわよね。それとこの画家さん、朱(赫)を射し彩として置くことが拘りなのよね。ほら、後ろの農民の一家も朱(赫)を射し彩に使っているじゃない。この朱の意味への探求はチョット楽しめそうよね」

「いやあ、流石玲子さん。この2年の間に眼は益々磨かれたようすな！ 君は今大切なことを云ったよね。いかさま師でも見ているようだと」達也の手は、怜子の背中に当てられたままだった。

「ちょっとあっちへ行ってみよう」達也はそういうと次の展示室むけて玲子の背中を優しく押す。

「あら……ラ・トゥールね」

「君はこのラ・トゥールのいかさま師とル・ナン兄弟の画が、ルーブルのシュリー翼と一緒に掛けられていることは知っていたのかな？」

「知らない知らない……」

「だとするなら、君の言葉はシンクロニシティーを生んだんだよね。これは凄い洞察力だぜ。さらに言えば、こっちの画だけど…… トリックトラックというタイトルだけどさ** **ほら…… 」

「まるでラ・トゥールのいかさま師…… いやカラヴァッジオのいかさま師みたい……」

「だろっ？」

「でもさ、ル・ナン兄弟って、カラヴァッジェスキというわけでもなかったんでしょ？」

ルナン兄弟のトリック・トラックに向き合ったまま玲子は言葉を続けたが、その言葉には幾許かの汗の流れが達也には感じられた。

【なにかが玲子をこの2年の間に変えている。なにか、一筋縄ではゆかぬ図太さを身に纏っている。なんなのか。僕が面倒くさがり真面目に相手をしなかった2年。ヴィエナの旅で僕が感じた嫌な予感から2年。あれから2年の間、玲子の身の上にはいったい何が……二年ありゃ、大抵のこと…… 何だって出来るのよ！】

「ほらっ、たっちゃん行くわよ」

怜子の声は通路の先から届けられた。気付かぬうちに達也の手は玲子の背中を外れ、空気をなぞっていた。

「考え過ぎだ。まあいい。これまで通りさ。なにも変わりゃしない……」

と。

「あらあ～来てたの？ 寒くなかった？ 人が多くて大変だったでしょう。チエちゃんも来たんでちゅねえ～いい子でちたねえ～ ちゃむくないれしゅかあ？」

少し距離があったが達也は玲子の話し声を耳にした。

「こんな所で知り合いか？ *いい子でちたねえ～ ちゃむくないれしゅかあ？ って……だ

れっ!! 誰と話しているんだ…… 」

達也の脚は、いや、軀はさながら金縛り下にあるように動かすことが出来ずにいた。60 絡みの妙齡のご婦人は、朱色に艶めくビロードの抱っこ紐を前に回しており、その中から幼児が手と顔をだし、近寄る玲子に笑顔を魅せて何かを告げる。

「2年か…… 」達也の軀の自由はまだ戻らなかった。

達也の背後ではル・ナン兄弟の手によるトリック・トラックの画と、ラ・トゥールの手による“いかさま師”が達也の背中を見送っている。ル・ナン作 農民の一家の女性が手にする射し彩の効いた赤ワイングラスが、どこか高飛車にボンボヤージと告げているように感じられた。

フワついた足元、遠くで聞いていた、玲子の「ねえ～たっちゃん* ** *_!!」と呼ぶ声に達也の脚は半歩後ろに下がることを止められずにいた。

射し彩の効いた赫い剣弁高芯咲きの薔薇のように頬を染めた玲子の姿が眩しすぎて感じられ「何だって出来るのよ! かぁ～」と呟いた。



スクリーンショット 2024-11-19 04:27:47.png

付記に俺流解析綴じ込み・ショートショート『えん嗟』本文 3399字

食事前の猶予と言う家族の肖像画…… 声にだすことなく、僕はタイトルを黙読した。幾度も幾度も声にはださず目視で字面を追う。長いタイトルである。「食事前の猶予と言う家族の肖像画……」僕は何度もタイトルを反芻する。声に出してしまうと、オールドマスターの作品に冠したタイトルの“本質”が煮崩れしだし、溶けだした馬鈴薯か何かのようになってしまいそうで怖かった。それだけは避けたかった。画を愛でる者として。

掴めそうで掴めず、実態はあるもののヌメヌメとした質感を纏った鰻のようでもあり、何処か掴みどころのない「食事前の猶予と言う家族の肖像画」というタイトル** ** __**。

【この作品は、サスペンスかミステリー……いや寧ろ、ホラーかもしれない】

62歳の誕生日を三日後に控えた今日この頃。ついに幾許かの混濁を感じはじめた記憶の中、トラウマが主張しはじめる。

【ほらほら、やっと思い出してくれたかい？ 覚えているだろう～？ ほら、あれだよ。大っ嫌いだったじゃないか？】

あわよくば、跡形もなく煮崩れしてほしかった記憶。後に家族という言葉が呪詛にも思えたあの日の記憶がヌメヌメとした肌感をともない、僕の記憶に纏わりつく。

僕はインターネット上の美術系サイトのネットサーフィンを楽しんでいた。足掛け2年に渡る腓炎による痛みを市販薬で抑えながら、好きな絵画を探してネット上を彷徨い渡る。

一枚の画でクリックの手が止まった。いや、正確には画ではなかった。文字列** __**
*タイトルを眺めたところで手が止まった。

「なんだ…… このタイトルは……」

僕にとっては手を止めるには十分すぎるタイトルだった。躡くには十分すぎる文字列。一瞬にして「猶予」という言葉の持つ奥行きと、およそブワブワとした時刻(とき)の頭しを感じようと五感が闘いを見せはじめる。

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚、そして僕の大好きな超感覚(第六感)。

絵画を愛でるのに五感というのは分らない～ というお人もおられるか。
そういう手合いは学者向きなのだ。感動を好物とする者は五感を磨くことに余念がない。
味わい尽くすのだ。

【1602年の作品、ということはタイトルは概ね後付け。画家自らが名付けたタイトルとは考えにくい】

僕の眼は、画を追うことなくタイトルを追い続けていた。

17世紀以前の著名な画家たちの作品群をオールドマスターと呼ぶのだが、この時代の画家たちは、自らの作品にタイトルをつける習慣は無かったというのが定説となっている。その後、オールドマスターの作品にタイトルがつけられるようになったのは、18世紀に入ってからであり、絵画が一般大衆の娯楽文化として認知される機会となった、オークションが賑やかとなりだしてからでもあった。

【画を売るに、説明するにもタイトルがあった方が色々都合が良かったのだろう** __ **
** それにしても……タイトルをつけた者は何故こんなにも長いタイトルをつけたのだろう。そして何故、猶予という言葉をつける必要があったのだろう】僕は“猶予”という言葉に云いようのない不可解な躓きを感じていた。

【画の中に“猶予”に通じるヒントがあるというのだろうか……】

主張をはじめたトラウマに見て見ぬふりを決め込みながら、無理やり僕は意識を“猶予”という言葉の意味に向ける。結局はトラウマに通じてくることも知らぬままに。いや……寧ろ、牛蒡の根っこのようにキリ際限なく地中深くまで掘り進めることへの予感から遠ざかろうとでもするように。

無駄な足掻きという文字列が灯っては消え、灯っては消えを繰り返す。

「猶予」という言葉の意味を探るため、画に見入る。

云わんコッチャナイ。無駄なあがきであったことを痛感する。トラウマが既視感を伴い脳裏に去来する。

昭和42年、僕がまだ幼稚園児だったころ。僕は北海道の港町、小樽に住んでいた。幼稚園は当時小樽でも名門と云われた小樽幼稚園に通っていた。

小樽は母が育った町であり、母の実家は当時の小樽では名家として名高かった。家業

は「歯科医」であり、七人兄妹の長男は、北海道大学を出た北海道でも名を馳せた超がつくほど有名な外科医 (後に隻足の外科医) として成功していた家系だった。男兄弟4人は全員、名門小樽潮陵高等学校から国立大学、北大、横浜国大と頭良しばかり。女三姉妹はこれまた当時の女学校の名門、小樽双葉出身。

僕の自宅は小樽幼稚園の学区からは随分遠かった。バスで乗り継いでゆこうとすると1時間にかかる距離。行きは毎日父が幼稚園まで送ってくれた。帰りは自宅には帰らず、爺ちゃんと婆ちゃん家 (ち) まで帰っていた。後年聞いたところによると、小樽幼稚園にこり押し入園させたのは婆ちゃんだったらしい。

この婆ちゃんがクセモノだった。いや、今、この歳にして考えるのなら婆ちゃんの抱えた懸念や疑念は大いに理解はできるのだが、残念ながら、僕は婆ちゃんや爺ちゃんからの慈愛や寵愛を受けることは無かった。

それは、僕が一番孫だったからなのだ。それも、祝うに値する結婚によって出来た孫ではなかったのだ。

北海道歯科医師会の重鎮、小樽のI家の長女の結婚相手が、明日をもしれぬドラム叩きのバンドマン。結婚式も挙げられず、挙句の果てが亭主は再婚。出自を聞けば、自らは妾の子供という非嫡出子であり、挙句が出来ちゃった結婚。そりゃあ婆ちゃんにとっては憎んでも憎み切れないゴクツブシとなっていたことは想像に容易い。

奇しくも、この婆ちゃんの懸念や疑念は程なく的中することになるのだが。僕のトラウマからは話がズレるので先を急ごうか。

婆ちゃん家 (ち) に幼稚園から帰ると、実家に住んでいたお袋の妹たち (叔母) や、兄弟たちからは随分可愛がられた。特に、二女と三男は (叔母叔父) は僕を色々なところへと連れて歩きたがった。行きつけの百貨店に行けば、告げもせぬのに外商が顔を見せ、I家の坊ちゃんですか？ と甘ったるい声をだし、お菓子売り場のキャンディーコーナーに連れていかれて袋一杯の飴を持たされる。寿司屋に行けばネタ箱には無いマグロが出てくる。

子供ながらに家名の力。特別感を感じる日々だった。

ただ、たった一つの「猶予」を除いてなのだが。
僕には、当時三日の猶予が与えられていた。

三日に一度、婆ちゃんにツメの検査をされるのである。

三日に一度、両手両足のツメの検査を婆ちゃんから受けるのである。

そして** __* 切られる。爪を切られる。

三日に一度、まだ伸び切っていない爪を深爪される。

それも、爪切りではない。裁縫用の糸切ばさみで切られるのである。

刃先が指先に刺さる。血が滲んだ。それでも婆ちゃんの鉋を動かす指先からは容赦を感じることは無かった。

いつしか僕は「婆ちゃんは僕が嫌いなんだ」と思うようになった。漠然と。僕が嫌いだから痛いと言っても爪を切るんだと思うようになった。母にも泣きついた。婆ちゃんの爪切りが嫌だ。痛い。深爪された小さな手の指先は、化膿して赤く腫れていた。それでも三日後には婆ちゃんの検査と爪切りが待っていた。

婆ちゃんの当時の想いが臍氣に理解できるようになったのは、僕が18歳になった頃だろうか。そして、成る程なとしっかりとした肚落ちを見るようになったのは、僕の母が鬼籍に入ってからのこと。叔母たちから、母と婆ちゃんの関係についての思い出話を聞くようになってからだった。

望むべくして祝える孫ではない男孫が一番孫になった口惜しさ。その種付けが非嫡出子のゴロツキクズレというバンドマン。

親として、さぞ悔しかっただろう。

出来ることなら家族とすら呼びたくはなかつただろう。血縁者とは考えたくもなかつただろう。

僕のトラウマのひとつは、この二年の間によりあからさまな形を伴い居場所を整えた。

年端もゆかぬ子供たちが合わせる手は何を祈るのだろう。食事前の祈りが猶予を顕すものなのだろうか。食事後に繰り広げられる行儀悪さに向けられた婆ちゃんからの叱責迄の猶予なのだろうか。

子供たちの小さく合わせた手をみると ** __*、

小樽の海で泣きながら遊んだ幼稚園児の時分を思い出し、思わずブルッと震えるのである。

一人の老女の眼だけがうつろなことに、猶予の先の憂いをみた思いがし、何かホットしている僕に気がつく絵画鑑賞だった。

了



スクリーンショット 2024-11-26 140620.png

ショートショート「小説・尋常なる異常という日常」 3340字

※一部、血にかかわる描写が続きます。弱い方はお帰り下さいますよう。また、心の病、こころを弱めておられる方にはお勧めできません。速やかに出口にお進みください。また、元気な時でも油断できません。むしろ書き手としても小さくない葛藤を抱きながらの上梓です。では、はじまりはじまり～



う・に・い・く・ら、う・に・い・く・ら・・・・・・・・イチマンエン

う・に・い・く・ら、う・に・い・く・ら・・・・・・・・ニマンエン

うべー、今日の昼の売り上げさあ、48000円もあったぞ。そのうち、デリの売り上げだけで32000円はデカいなあ。

そんなにあったの？ デリで。やっぱ、雨降るとデリが伸びるよなあ～

賄いでも食べ終わったのだろう。つま楊枝を咥え、煙草に火をつけたうべは紫煙を吸い込むと天を見上げ、大きく吐き出した煙を追う仕草をみせる。

続けざまに大仰にゲップをしてみせた口元の髭にはご飯粒がくっつき、なんとも間抜けな塩梅をみせていた。云うまでもなく、こんな姿は客には見せられるものではなく、街中で見かけたとしたら、女子供にいたっては、遠巻きにそして逃げるように、振り返り振り返り走り抜けてゆくはずだと思えた。

けして食べ物づくりを生業とした日本料理職人歴二十数年、某テレビ局の「料理の○人」から声が掛かった料理人のそれとは思えないのは当然のこと、この姿を見止めた客にそれを伝えたところで信じる者は皆無だろう。

うべー、どうでもいいけどさ、ポチポチ、サロン洗濯しろよ。余りにも汚いべ。

うん？ 汚い？ やっぱし汚い？

それじゃあ、客前に出られんべよ。替えのサロンは持ってないのかよ？ じゃあ、取り敢えず、俺の使っておけよ。俺、休憩のときにサッと洗ってくるから。

有線放送から流れるMJQ、ミルトのヴィブラフォンの調べが外の雨音にシンクロを魅せる**__と、店の電話がその着信メロディーでぶち壊す。

「はいっ、デリー！！ これで50000円ゲット～」

「あいよお～！！」

ありがとうございます、〇〇〇〇屋です。

最初にご住所から頂けますか？ はい。ええ～大阪市西区〇〇崎～ええ～、はい。ではご注文をどうぞ** **畏まりました。1590円になります。お味噌汁もついてますよ。それでは後ほど～

「うにいく一丁、イクラダブルで～」

「うにいく一丁イクラダブ～～ あいなあ～」

客がいなくても、元気だけは良かった。

外は冷たい冬の雨が堕ちていた。時間は2時をまわっていた。ポチポチ、デリバリーの電話も止まるころだ。ランチで埋まっていた客席も凡て空席。

パソコンに向かい、顧客情報の登録を打ち込む。顧客ナンバー、日付、時間、性別、名前、住所、電話番号、注文内容、利用金額、注文回数、特記事項。

配達先の地図を確認する** **。

うべっ、ここアレだな、料理組合の裏にあるマンションだな……

料理組合って、あそこのあれかい？

弟の“うべ”の手はデリバリーの料理を手早く作る。手がとまることは無い。日本料理職人歴二十数年の手業が光る。兎に角、丁寧で早い。段取りの勝利なのだろう。なのにサロンは汚れていた。着るものも頓着をみせない。

「会議？ バッカ野郎🎵、会議で喋れるぐらいだったら料理人なんかやってるかい！！」
という使いにくさも板前修業時代にはあったようだ。

沸騰寸前まで温めた味噌汁を、ポットに流し込むとデリの準備は完了だ。

じゃあ行ってくるわ

僕は自転車で出前に向かう。傘を手に、初冬の冷たい雨の中、今日、十数度目の出前に向かった。

【今日の売り上げは10万超えるな～】夜の予約から売り上げを逆算し、仕入れの計画を

立っていた。

配達先は簡単に見つけることが出来た。マンション前には持ち主不肖のサドルの取り外された自転車があるなさに留め置かれ、場所柄に見られる荒んだ気配が弥が上にも治安への懸念を感じさせた。

【盗難防止かもしれないしなあ。うちの自転車も帰るときはこうしておこうか】

ベージュの安っぽいタイルが貼り付けられた壁はところどころ剥げ落ち、マンション名のプレートの文字も塗装が剥げ落ちていた。

マンションの玄関内に入ると、正面右手には郵便受けが並んでいた。整然とという言葉からは程遠く、ポストの投函口の凡てから死んだ犬の舌のようにチラシがだらりとだらしなく顔を覗かせていた。

「ちらしは入れないでください」と書かれた注意書きがなにか申し訳なさそうに左に傾いている。

お、フラゴナールかよ、ブランコ掛けるかねここに。意味わかって掛けてんのかよ。それにしても……ロココの申し子も、こんな処で色褪せちゃっては仕方ねえなあ。

しかし、ロココもこうなると場末感を増す役にしかたたん。本来は尋常ならざる存在感を感じさせるロココの巨匠の画だったはずが、今となってはあまりにも尋常すぎる異常な存在だ。このマンションの格を落とす……いや、然るべく〜か。

エレベーターホールのガラス枠の中には、色褪せ、変色したフラゴナールの複写画「ブランコ」が掛けられていた。西日がはいる玄関だった。画の日焼けが著しい。複写だから余計なことなのだろう。ブランコから、スカートの中、秘所をみせる女、左下の木陰からスカートの中を覗き見て歓喜する男。

左上には、天使が指先を立て、「シーっ」としている。

右後ろでブランコを揺らしているのが“彼女の旦那”だっていうのだから、モチーフとしては悪趣味であり、場末感の演出にはもってこいではある。

一見、見るだにおいては尋常な風景なのだが、その実異常。異常な日常である。

「間男と亭主とその嫁」てなタイトルにした方が風俗画としての存在感は高まっただろうに。

一階に停まっていたエレベーターに乗り込むと、独り言を呟きお客様の部屋の階を

プッシュする。エレベーターが古いせいだろう。一度、大きく沈み込んでから上へと動き出す。

程なくエレベーターは小刻みに揺れながら3階で停まった。グラグラと震えながら扉があく。

正面右手からは料理組合の行燈やら提灯やら灯を墮としたネオンが見えた。大阪西の歓楽街。○島料理組合の一角だった。

呼び鈴のインターホンを鳴らすと、程なくして若い女性の声が応答する。

「まいどう○○○○屋でーす」

「…… ちょっと待ってください」の声。

鍵がはずされる音が聞こえる。

チェーンが外される音が聞こえる。

扉があいた。

「おまたせしま** **お嬢さん!! 何したの!! 大丈夫ですか!!」

「あゝ……うふふ…だい〜じょう……ぶです」

玄関の三和土を真っ赤に染めるおびただしい血。

壁、廊下は云うに及ばず、目に入るところの凡てに血糊が付着していた。それも古いものではない。少女といっても大袈裟ではない彼女の腕からは、今正に鮮血がしたり落ちていた。血は止まっていなかった。左手首付近を出どころとし、腕を伝い肘の先から流れ落ち、玄関に血だまりをつくる。

少女の右手の指先にはさまれた2枚の千円札に血糊がつかぬようヒラヒラとさせると、少女は「足りますか」と尋ねた。ピン札だった。

「はい。いま・・・おつりを・・・○○さん、大丈夫ですか?」受付のときに聞き取った名前を告げる。

「お味噌汁が汚れちゃいけないので、外で入れますね。ごめんなさい。」

「あゝ大丈夫です。す…み……ません」

「救急車・・・呼びましょうか?」

「大丈夫です。」

「ウニイクラ丼のイクラダブルです。病院に行ってくださいね」

「ありがとうございます」というと、玄関は閉じられた。

シュールだ。あまりにも。現実とは思えぬシュールさである。

嘔吐いた。僕はエレベーターホール脇の非常階段のところまで走ると、おもいきり嘔吐いた。鮮血をながしながら真っ赤なイクラを頬張る少女の姿を想像して嘔吐く** **。

【賄いを喰う前でよかった。胃液しかでやしない。さて、どうする。どうすることが正着か。】

エレベーターに乗ると自問した。

1階エレベーターホール。フラゴナールのブランコの前、携帯電話を手にとると110番をプッシュした。

「事件ですか緊急ですか」

「部屋で血を流している女性がいます」

「……はい……はい。では警察官を向かわせます。そこで待てますか?」

「はい。救急車も来た方がいいと思います」

電話を切るとフラゴナールに眼をやる。

アイロニーという言葉が頭の中流れる。

間男に恥部をみせている女は喜んでいるように見える。後ろでは亭主がブランコの紐を操る。あの紐が……。

ここは○島…… 日常の一コマなのか。尋常な少女が異常な中に身をやつし血を流す。

尋常な少女が出前を注文しただけなのだ。

異常な状況下で。

それが成立する日常ということに過ぎないのか。

__紙一重……か。

了



スクリーンショット 2024-12-15 13 15 05.png

ショートショート「尋常なる異常という日常」 俺流解説編

さて、有難いことにアクセスと評価を手厚くいただけているようなのが何よりです。心から御礼申し上げます。素人ですから嬉しくて仕方ありません。
だからと云って、調子に乗って解説を書いたわけではありません。
悪しからず。

作者の客観的な見方として、言葉の選択にはまだまだ緩さと甘さは否めません。美しくない。言ってみれば選択する言葉が幼稚だ。もっともっと汗をかかなければ駄目なのです。

しかし、お話しとテーマの組み立ては納得の仕上がりだ。
これは書ける。書けるものなら書いて味噌汁と。わたらしい〜という意味でね。だいぶ“リハビリ”としては仕上がってきたようでもある。んなもなあ、誰も褒めてくれないのだから、自分で褒めるのだわよ。どの道、誰かに何かを云われたって、はいそうですかと聞くタイプじゃないのである(笑)

ただね、わたしの場合、秀でたものに触れるとね直ぐに“参りました”となれる。そして嫉妬する(笑) ただし乾いた嫉妬。嫉妬に関しても粘着質は持ち合わせていないのである。したがって、他人様を恨むということがない。ある意味鈍感。動くときは早くて客観的。一点全集中なのである。小説書いてもテーマが決まればショートショートなら早い。

今回の作品の場合は、タイトルありき。実際に、目にしたことを絵画を触媒にデフォルメ。考えると、書けることは山盛りではある** **のか。 宜しければ、心が健康な状態のときに、お楽しみあれ。

イトル 「尋常なる異常という日常」
自画自賛になるが、まずもってこれが良い。

何がどう良いのか。

テーマを忍ばせやすいタイトルでもある。

意味深長……ばい。ぼく聞こえる。ぼく読める。

こういう持ってまわったタイトルは、なにか今風でもあり嫌いではない。

問題は、作中への忍ばせ方となるのだが、ザックリ書かせて頂くと3340字を4つのステージに分割している。プロットなどと偉そうに言える代物では無い。

■最初のステージで兄弟を背景として日常、尋常、異常をふわりと滲ませている。ここではタイトルに関わる言葉は使っていない。

■次に、フラゴナールの「ブランコ」という画を触媒に尋常、異常、日常を炙り出している。「あ〜、世一はここでタイトルを拾ったのか」と思った方もいるかもしれない。しかし、これは次のステージへの伏線に過ぎないのである。

「次のステージ？」そう。あの少女との遣り取りへの伏線なのだ。

あそこがこの作品の肝である。

もう少し書き込みたい気持ちも働いたが、これ以上は恣意的が勝ると思え、必要最小限に抑えた次第。

■読んで頂いて分かっておられる方もいただろう。

自殺をしようとする少女が頼む出前。

自殺をしようとする少女を前にしたデリバリーの兄ちゃん。

血まみれの少女。

お金を血で汚さない気遣いが出来る少女。

商品説明をする兄ちゃん。

外に出てまで味噌汁を入れようとする兄ちゃん。

ここに、本来の「尋常なる異常という日常」というタイトルを文字を使わずして埋めた。

■最後のステージではまとめとして「尋常なる異常という日常」というものを通じて社

会に潜むものへの風刺を滲ませて纏めとしている。

触媒として引っ張り出したフラゴナールのブランコという絵画作品があったからこそ、効かせをみせることが出来たショートショート。

■メタファでありアレゴリーの使い方は書くまでもなく、私チックなものに仕上げたつもりだ。

死を予感させる一節

男を悦ばせる仕事に結びつく幾つかの言葉

生の対極である死の対比

作中、幾つかの躓きであり、幾つかの疑問が首を擡げてくる人も居るかもしれぬ。そうするとまた愉しくなってくるのでございます。

本来、書き手が自らこういうものを書くべきではない。

話しにならない。

書かずとも、分る人は分る。それでいいのだ。

なのに何故書いたのか。それは、わたしが分かっていたら良いのである。

因みに、直近で書いた3本のエッセーが連作だったことだけは知っておいてほしい。

絵画はね、小説と同じなのよ。詩と同じなの。

『一筆一筆色を入れるのが絵画。

眼に見えぬ言葉をのせて

ならば想像してみるしかないのである。聞けないのだから』

フラゴナールのブランコなどは比較的「弄りやすい」かもしれぬが、重層感が感じられなければ薄く、淡白になりがちにもなるだろう。読み疲れしないショートショートぐらいが手ごろかもしれぬ。

久しぶりに書いていて楽しいものを書けた。
筆がのったという意味でね。
内容は楽しいものではない。

了

一服ショート「小説刹那にかわる愛を探して」1229字

「小説 刹那にかわる・・・愛を探して」

触媒とした画・フラナゴールの手によるブランコ 風俗画 ロココ

※注 本稿と絵画の歴史的な関りはありません。史実と伝承を基にした創作です。



スクリーンショット 2024-12-15 13:15:05.png

ここはベルサイユの裏庭。

さて、その奥には、「朕は国家なり」の迷言で知られるルイ 14 世太陽王の命により建てられた Petit Trianon プチ・トリアノンが、今は、今宵の宴にそなえ、静かに佇んでいます。

あの頃は良かったのです。

毎夜毎夜、夜会は繰り広げられてはいたのですが、まだ、目を覆いたくなるような光景は控えめでした。

ルイ 14 世太陽王は、興が乗ると幼少期より得意だったバレーを踊りだし、ギリシャ神話の太陽神アポロンに扮するのが十八番でした。後にそれが太陽王と云うあだ名に繋がったようで、わたし達も自慢の王様ではあったのですが……。

ほら……おいでなさいましたよ。今宵も主役のアントワネット妃が。皆さん、今日もはじまりますよ。刹那なひとときが。

「シーッ!! そのクピドー諸君! 今日こそは矢を射るのはやめ給え。頼みましたよ!!

姫君は声が大きいのですから。」

おやっ? 既に草葉の陰にひかえしは、フェルゼン伯爵が……、しかし、伯爵よろしいのですか? そこで。そこは、先ほどデュ・バリー夫人が「花を摘みに」いらした場所。それもどうやらあの匂いから申し上げるなら、大きなお花を摘んだようでいらっしゃる。ほどほどに肥やしも効いてる頃合いかと。

ルイ 16 世の統治にいたってはこのとおり。日ごと夜ごと、このお姫様のご狂乱による哥会、ギャンブル、パーティーが催されるのが常でした。

ただでございます。

パーティーと申し上げることすら憚られるパーティーであり、その実は、口にすることも汚らわしき、忌々ゆゆしき酒池肉林の宴が繰り広げられるのが常でした。

こここのところのマリー・アントワネット妃は、お気に入りのフェルゼン伯爵一本ではあったのですが、その振る舞いは刹那的であり廃頹的でありすぎると民にもうわさが広がる始末。事が大きくなる前に自重してくれば良いのですが。嫌な予感がしていました。

どこぞのお国の政治家のように、グリーン馬車不倫などがすっぱ抜かれでもしたら取り返しがつきません。クワバラクワバラでございます。

それにしても世は刹那ばやり。愛も刹那、恋も刹那、一夜も刹那。

詩人はみんな刹那を口ずさみます。刹那に替わる愛を探してみても如何でしょう。長しえに～ 長き夜の～ 無窮～、長久なんていかがでしょう。

なんて? 今なんとおしゃいました? クピドー君。

「仕事の邪魔をするなど? 刹那があるから忙しいと?」

そうかもしれませぬねえ。

わたしも随分あなた達からの矢を頂戴しましたから。

うわっ!! とぅ!! 姫様に聞こえたのかしら。スリッパが飛んできましたよ!

またあんなに足を開かれて～

フェルゼン伯爵～そこはデュ・バリー夫人のう〇こが!!

Petit Trianon の幕が開くようでございます。

俺流解説編 ショートショート『小説 Fae Trap』

俺流解説編 ショートショート『小説 Fae Trap』

いつも書かせてもらうことだが、解説を書くのは調子に乗って書いているわけではないので悪しからず。むしろ、自分のために書いているという目的の方が強い。興味がある人だけが読んでくれれば十分です。

少なくとも、自分が何をどの様にかはしっかり知っておくことも必要でしょう。まだまだ、評価を受けられるような身からは程遠いのですからちゃんと意志だけは機能させておきたい。

『小説 Fae Trap』の面白味は、詩小説であるということでしょう。
わたしはこれを「ポエベル」と呼ぶことにした(笑)

どうでしょう。おかしな雰囲気を感じて頂くことでいただろうか。

有り難い、有り難い、読み手さんから頂いた一つのコメントに_** ** *

『あかい花と少年が重なっていくようで、文章も風のおもしろかったです!』と頂いたのだが、この「おもしろかったです」というのは、この作品に対する最上級の誉め言葉を頂戴したと感じている。

感じ方は、感じ手が都合よく感じるに限るのであります。

むしろ、“おもしろかった”としか表現のしようが無かったのかもしれない。何故なら、それが「おかしな雰囲気」に繋がってゆくからなのだが。

これは、普通の小説では出来ないことを可能としてくれたという「面白味」の存在があるのだが、それは「人称」に顕れる。

通常の小説の場合、地文は一人称、三人称が常套となる。ここでは三人称としている。俗にいう神語りでもある。

しかし、そこに詩が入り込むことによって、話しを空中浮遊させることが可能になる。途中まで、三人称の地文と、一人称の詩編が紡がれてゆくことは分って頂けると思う。ところが、後半でその前提が崩れる。所謂、わたし流にいう処の、足元をぐらつかせるという狙いへの導入だ。

例えばと云うことで眺めて欲しい。

この小説のエンディング手前が最も我が魂を散りばめた場面となるのだが……この詩の登場によって、作品自体が朧にくるまれたようになる。

「えっ？ なに？ どうした？ 何か変だ！！ 何処に戻ってもう一度読めばよい？」となることを狙っている。

赤い花よ
わたしはきみが好きだ
わたしを美しく見せてくれる
きみが好きだ
みんなが一緒に首を揺らす
それでもきみを見失うことは無い
たった一輪赤いから

知ってるかい
妖精の罠というお話しを
きみはどちらに眼がゆくだろう
一輪の赤い花
大勢の黄色い花たち
どちらが妖精の罠なのだろう
次元の狭間に飛ばされるのは
どちらの花に触れたらだろう

わたしは赤い花に触れてるよ
…… 飛ばされずに

この自由詩においての語り手は、ご理解いただけるように「熊蜂」である。そして、熊蜂の語りに向く先は二人いるのだ。

前段は、赤い花

後段は、少年である

即ち、少年は熊蜂の視点をかり、赤い花と書き手の少年自身に向けて語り掛けている。

わたしが小説というものに持つ感覚からするのであれば、合理性をもたせることは極めて難しいと感じている。「詩」という存在がこれをするに合理性を担保し得ていると感じる。しかし、これを小説として可能とする方法は無いのだろうか。

多分あるのだろう。そう云うテクニックはあるはずだ。

わたしが出来ないだけだろう。書けないだけだろう。

が、わたしのレベルで考えついたことを書かせて頂くのなら

「劇詩」が思い出される。 劇詩 (韻文詩・韻文劇) なら確実にやれる。

劇中劇の理論を持ち込めばやれるはずだ。

文学を学んでいないものの悲しい奠。ここまでだ。目一杯だ。

ただ、今年わたしは韻文詩であり劇詩、詩劇を独学で勉強することができた。この作品の中に、その一端を少しだけ覗かせることができたと思っている。

(笑) タイトルの FaeTrap を最後の最後に文字通り、散りばめてみたのだからお楽しみいただけたでしょうか。

熊蜂が妖精だったのかどうかは、読み手にお任せしたいところです♪
たいした問題ではないでしょう。

あくまでも書き手の欲。こんな思いで書きましたということに尽きるわけで、読んだ方が何を感じて頂けたかはお任せするしかないのです。

どうやら、沢山の方に読んで頂けたようで、本当に感謝しております。
有り難うございました。

了

ショートショート『小説 Fae Trap』 3 4 6 1 字 “ポエベル という世界”

注) 一部、現代社会においては、蔑称として取りざたされる言葉が登場しますが、筆者が子供の頃、即ち、50年前の臨場感をリアルに表現するため使用しておりますことご案内申し上げます。けして、日常生活においてそのような侮蔑の言葉を使用しているとは努々考えませぬようご案内申し上げます。

世一

ぼくは飄かせ
きみは雲
ぼくが得意なことは匂いを運ぶこと
揺ら揺らはこぶ
浮わ浮わはこぶ
ひゅーひゅービュンビュン運ぶんだ
匂いを運ぶだけじゃないんだよ
お手伝いだってできるのさ
季節を連れてくるでしょう
美味しい種も連れてくるでしょう
悪い流行り病は吹き飛ばす
でもね時々失敗もするのさ
火事で困っているひと手伝うと
劫劫劫ごうごうごうって火事大きくなるから
悲しくなる

でもねでもね
一番ぼくの悲しいことは
きみを掴まえないことなんだ
ぼくが急いできみに追いつこうとするでしょう
するとね

きみはきえっちゃうのさ
棚引くシippoを漂わせて

少年は詩を削きざむことが得意でした。中でも、風の詩を削むことを好んでいたように丘に展りては丘吹く風を詩い、山に登りては谷わたり吹き上げる風を詩い、海ながめては波乗りみたいに波頭けずる風を観察しては詩を編んでいました。

編んだ詩は少年の大切なノートに書き認したためられてゆきました。
夏が終わるころには「夏の風たちのお話」で、少年のノートはびっしりです。秋が終わるころにはノートも終わりそうでした。

少年は一人でいることが次第に多くなりました。野球も、サッカーもスキでした。でも野球やサッカーを好きな友達の中には、詩が好きな友達はいませんでした。それどころか、サッカーをしながら“うける風”を詩に編んだとき、少年は友達からある言葉を投げかけられたのです。

「…… お前、何書いているんだよ* ** * __* なんだよそれ、みせてみろ。ゲッ、なんだこれ、おい皆あ〜こいつオカマ野郎だったんだあ!!」

友達は、少年のノートを取り上げると飛び跳ねながらノートを天高くがざしました。風が音をたててノートを捲りました。

【やめろ!! 風が怒るから! 颯の呪文は強いんだ! おまえなんかイチコロさ】少年は心の中で呟きます。

周りの友達も「見せて見ろ、みせてみろ」と囃はやし立てました。

すると、先生がその友達からノートを取り上げます。

「雄太、体育の授業中にこんなもの書いていたのか? ちゃんとみんなのプレーをみて応援しなきゃダメだろう。だからお前は****」そこまで云った先生の眼は、巻き上げる焰が熾ほのおがおこす恐ろしい熱風を想わせました。

「こんなところにも? こんなところにも颯がいた。先生の中に風がいる」

少年は何も云えずに先生が手にしたノートを見つめていました。

さあ、体育の授業が終わって昼休み。教室の中は大騒ぎ。

「オカマあ〜オカマあ〜オカマ野郎」

「男のくせに“し”なんか書いて気持ちわりい」

少年は、体育の授業のおわりしな、先生から返されたノートに向かい一生懸命、サッカーに感じた風の詩を綴っていました。

腹が立ちました。自分のお腹の中、出口をもとめて巻き上がる竜巻を感じていたのです。

【駄目だ。。。レベル4だ。そうだ名前をつけてやろう……ぼくの竜巻だからね。ユータイスター…チョット違う。ユーツイスター。うん。ユーツイスターにしよう。これでまた詩ができるぞ】

少年は、聞かぬふりをしながら我慢をしなくて済むように、自分の興味のあることに考えをむけました。

知ってるかい

ぼくのお腹の中には竜巻の子供が棲んでいる

ふだんは寝ているのさ

ときどきご飯を食べに起きてくる

ぼくが満腹でもお構いなしさ

食べたくって食べてるんじゃないんだ

いつだってぼくの周りが食べさせる

食べたくなくても食べさせる

竜巻の子供はだんだんおおきくなるのさ

食べ過ぎるとね

最初は吐きたくなってくる

おかしいね

食べていないのに

おかしいね

悪いものも食べていない

吐いたらさスッキリすると思ってた

でもね

それが合図なんだ

ぼくの竜巻が爆発するさ

少年はノートの余白に書き殴りました。普段は丁寧を書くのですが今日は丁寧には書けません。でもね、少年は、自分にしか読むことのできない書き文字を身に付けていたのです。

先生からノートを返してもらうときに云われた一言がありました。

「雄太、お前のノートなんで読めるものと読めないものがあるんだ？ 丁寧に書いているのは読めるけど、時々、字が汚くて読めないものがある。まるで蚯蚓がはっているようだ。もっと字の練習をしなきゃ恥ずかしいぞ」と。

エッチな本も好きだった少年は、自分の気に入った言葉や知らない言葉を調べるとノートに書き記してもいました。とうさんや母さんに見つかったらヤバイから「何か方法を考えなきゃ」

少年は暗号を作りました。数字の数え方は何ページ目の何行目を言葉を繋ぎ暗号にしました。文章はわざとに崩して書きました。繋げて崩して簡略化させて。

「おかあさんのこうぶつ、おかあさんのこうぶつ、おかあ」23 頁

「おとうさんのこうぶつ、おとうさんのこ」17 行目……と。

これで誰に見られても平気だと考えていたようです。

学校からの帰り道。あたりには晩秋の風が西日をともない吹いていました。つめたい風でした。少年の首もとめがけて入り込もうとする風に、少年は手を前に組み合わせ、フーフーと温かな風を送ります。

帰り道に通る公園では、色とりどりの花たちが首を揺らしていました。

『これも風の得意なこと 花は風に揺れるから きっと綺麗なんだ そうさ揺れなけりゃ死んだみたいじゃん 動かないんだから 死んだものは書けないよ 死にそうなものだって書けやしない だってぼくは生きてるし 風も花も生きている おかあさんが買ってきた造花 ぜんぜん綺麗じゃない ドライフラワーだって意味わからない 死んだお花の何が好き？ 扇風機の風に驚いて 吹き飛ぶ枯れ花の何が好き』
少年はまるで歌を謳うように言葉を紡ぎました。

すると少年の眼に飛び込んだ景色の前。少年のちいさな足が止まります。

「なんという花だろう。すごく細い花卉が小刻みに風に震えてる」

少年は公園の道端で座り込んで花を観察しはじめました。花卉はプルプルと震えていました。細い茎の上、みんなが一斉に首を揺らしします。右へ左へ前へ後ろへ。一条乱れぬダンスを想わせました。

一匹の熊蜂が名も知らぬ花の上を行ったり来たりしています。

熊蜂の胴体が黄色いためでしょうか。黄色い花の上では姿が見えなくなります。風が強いせいでしょうか。首を揺らした瞬間に花から急に飛び出します。

「あゝ～いいね。その花ならよく見えるよ。熊蜂くん。その花の方が君にはお似合いさ」少年は独り言を呟くと大切なノートを鞆から取り出しました。強い風がバラバラと音を立ててページを捲ります。

余白のページを開き、手で抑えながら花たちを見詰めます。

少年は、一つのこと気がつきました。

『黄色い花…… 』

『黄色い花畑 そこに一輪赫い花 みんな揃って首こうべを刻む 風はみんなと一緒に揺らす なんになのに どうして君は赫いのだろう なんにどうしてひとりなの 君は赫くて平気かい ぼくなら竜巻育っちゃう ぼくならきっと吐いちゃうよ でもね 熊蜂くんは君が好きみたい 君の頭の周りを飛んでいる まるで妖精が飛び交うように』

少年は、丁寧な字で詩を紡ぎました。大切なノートに。

詩が出来上がり、立ち上がろうとしたときです。なにを思ったのでしょうか。少年はもう一度座り直すと、慌てたようにペンを走らせました。

赤い花よ

わたしはきみが好きだ

わたしを美しく見せてくれる

きみが好きだ

みんなと一緒に首を揺らす

それでもきみを見失うことは無い

たった一輪赤いから

知ってるかい

妖精の罠というお話を

きみはどちらに眼がゆくだろう

一輪の赤い花

大勢の黄色い花たち

どちらが妖精の罠なのだろう

次元の狭間に飛ばされるのは

どちらの花に触れたらだろう

わたしは赤い花に触れてるよ

…… 飛ばされずに

少年はノートに書き記すと

静かに立ちあがり、低くなった西日に向けて歩きはじめました。

風は口笛を吹いているようでした。

ヒュリー ヒュウーヒュウ と。

了

2024 飛鳥世一作品集《ぐだぐだのすすめ》

著 飛鳥世一

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
